

春の宵

森岡 正作

若鮎の

桜満ち仁王の力緩びけり
流速に歩幅合はざる桜狩
真間桜散り急ぐなよ急ぐなよ
高殿に酌む春宵の赤ワイン
三極の咲き三様の三姉妹
染卵紅茶カップに金の縁
逝く春を惜しまざるものなかりけり

鮎は私の一番好きな魚である。長女の名前も鮎子と付けた。男の子だったら鮎太であったが。中学高校時代の夏休みはもちろんのこと、大学の時も夏に帰省すれば鮎中心の毎日であった。朝起きるとすぐ川土手へ水の具合を見に行った。雨の日は当然駄目で、その濁りが澄むまでは憂鬱な日を送った。風があっても鮎と対決するのは水の底なので潜りさえすればよかった。そしてなんと教育実習の教材は宮地伝三郎の「鮎の話」で、指導教諭に「全て任せる」と言われた。鮎は写真でしか見たことがないとのことであった。

登四郎先生に「若鮎の口の緊りを佳しとせり」という御句がある。鮎の口の形は石に付いた苔を剥ぎ取るという性質上、他の大方の魚のように丸くない。「口の緊り」とはすばらしい把握であり、若鮎の凛々しさを端的に表現している。鮎は何につけてもよいのであるが、家の鮎子は何ともものんびりおっとりしたものである。